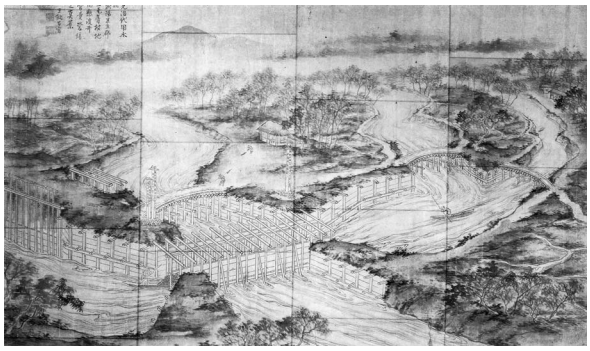
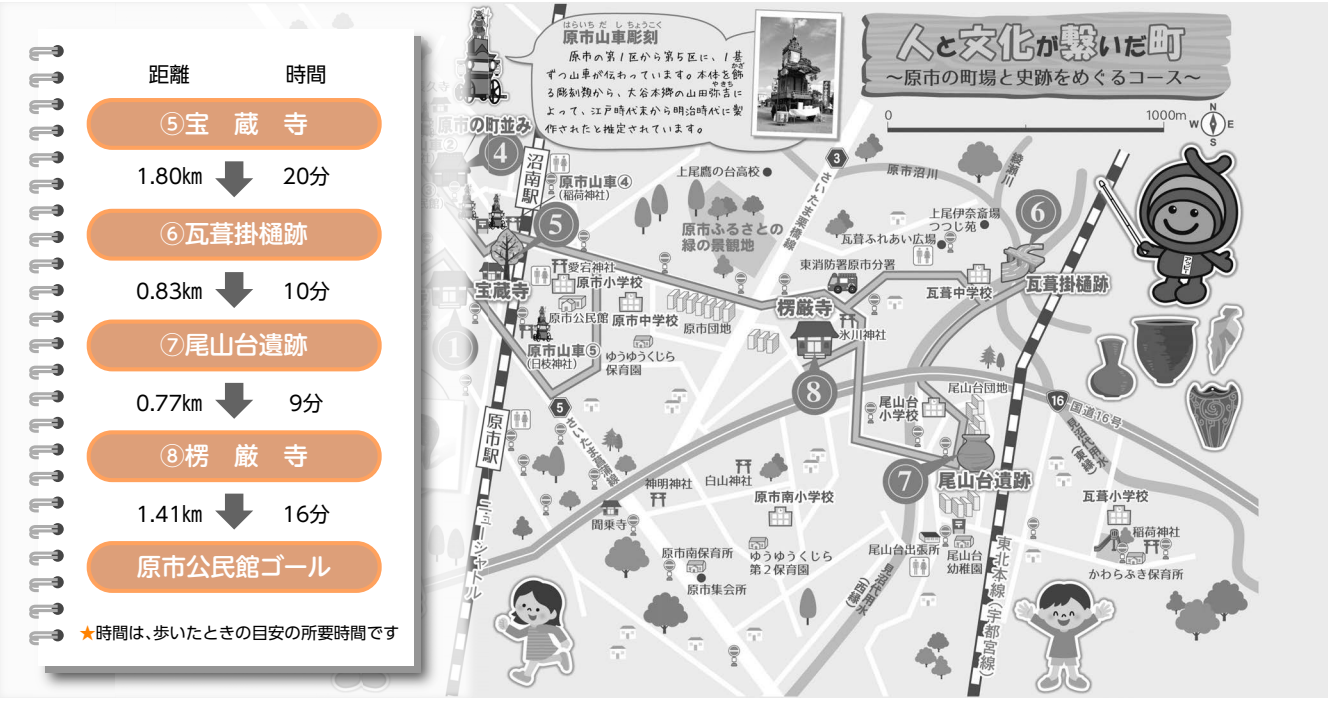
上尾歴史散歩 345



瓦葺懸渡井官費営繕之真景図（市役所1階に展示）

～文化遺産を訪ねて歩こう!!～

4月号から来年3月号までの上尾歴史散歩は、『あげお歴史探検マップ』をもとに、市内の文化遺産を訪ね歩く市内の散策コースを紹介します。10～12月は、原市地区周辺のコースを巡ります。



綾瀬川沿いに広がった文化

右手に原市団地、左手に原市ふるさと緑の景観地を望みながら、東へと進む。東消防署原市分署の先を左に曲がる。瓦葺中学校を過ぎると、市登録文化財の史跡**「瓦葺掛樋跡」⑥**がある。この地を流れる見沼代用水は、享保13（1728）年、見沼（さいたま市・川口市）の新田開発に伴い、農業用水を利根川から導水するため開削されたもので、ことし9月に世界かんがい施設遺産にも登録された。瓦葺掛樋は見沼代用水と綾瀬川が立体的に交差できるように架けられたもので、当初は木製の樋が用いられていたため、頻繁に修理・架け替えを行う必要があった。市指定文化財の「瓦葺懸渡井官費営繕之真景図」**（写真）**は、掛樋が木製であった頃の様子を知ることのできる貴重な資料である。掛樋は明治41（1908）年に鉄製へと改造され、現存するれんがの構造物は、鉄製樋を支えた橋台と翼壁である。昭和36（1961）年に掛樋は廃止され、見沼代用水が綾瀬川の下をくぐる伏越方式に変更されるが、現在でも日本の近代化の面影を伝えている。

見沼代用水の西縁に沿って南へ進んでいくと、尾山台団地が見えてくる。この一帯には**「尾山台遺跡」⑦**があり、昭和40（1965）年の団地建設時に、約1800～1700年前の弥生時代から古墳時代にかけての大集落が見つかった。約60軒にも及ぶ住居跡は、発掘当時他に例を見ない大規模なものであり、出土した土器の年代などから、何世代にも渡って利用されていたと考えられている。団地の中には住居跡を模したモニュメントがあり、古代からこの地が居住に適した場所であったことを示している。

尾山台団地から西へと延びる道を道なりに進んでいくと、左手に**「楞厳寺」⑧**がある。楞厳寺の中で特筆される文化財が「弘長板碑」である。梵字が刻まれた高さ約1メートルほどの板碑は、中世における供養塔の一種で、弘長元（1261）年の紀年銘があり、市内に約750基ある板碑の中で最古のものである。

楞厳寺から西に進み、JAさいたま原市支店の前の交差点を南側に入ると、今回の「原市の町場と史跡をめぐるコース」のゴールである原市公民館に着く。

次号からは、「街道に刻まれた歴史」をテーマに、探検マップ最後のコース上尾・上平地区を巡ろう。

（上尾市生涯学習課）